

シネマズライフ

2019年7月5日発行 第166号

http://p.booklog.jp/users/rion-takagi

たかさ りおん
貴樹 諒音

【最近のこれはお見事!】

『アルキメデスの大戦』

戦時中の話で、アルキメデスがどう関係するのかこちらもまた謎めいています。

【最近のこれはまずいぞ!】

『広告会社、男子寮のおかずくん』 謎めている題名というより意味不明。

映画の風景 日本の風景

※ 京都 御室撮影所 ※



← マキノ・プロダクションの花園天授ヶ丘にある御室撮影所。1928年(昭和3年)

『女優堂』という映画があった。こゝな映画だ。

新人監督の村井は新作映画に意欲を見せていた。撮影場所は撮影所でも古いスタジオ。撮影は順調に進むが、フィルムを現像してみると、まったく別の古い映像が映っていた。まったく別の古い映像が映っていた。まったく別の古い映像が映っていた。

その頃から撮影現場でロケバスにフィルムを映して、奇妙な事が起こり、嫌な予感のしな事から撮影所を預けていた古くから撮影所にいる丸さんを処分したという。丸さんには聞くと丸さんはフィルムを処分したという。丸さんには聞くと丸さんはフィルムを処分したという。

今回紹介したのは御室撮影所は今はない。日本の映画界の黎明期を支えたマキノ・プロダクションが作った撮影所でも、し、今存在していたら、この映画の撮影所より怪異現象が起る撮影所になつたかもしれない。

古い建物はどこか謎めいたところがある。しかし、多くの人々が生きていた場所でもあり、その人達の思いを感じるのが楽しみでもある。

『女優堂』1996年日本 監督：中田秀夫 脚本：高橋洋 出演：柳ユレイ 白鳥晴代 石橋けい 榎原季衣 大杉漣

中田秀夫監督はこの映画がきっかけで『リング』を監督、日本での幽霊の定番を塗り替えた。"貞子"像の原点の映画です。じわじわと来る恐怖はまた別の怖さがある。

新しいアイテムは使うべしと思う件

そして、もう一つヒットの要因は、監督はじめ出演者・スタッフ達がSNSを駆逐して多くの人達にアピールしたからだと思う。

ツイッターで公開劇場をアピールしコメントがあれば、いねをする。出演者・スタッフも劇場挨拶はできるだけ参加。それが広まり地方での公開劇場が決まると、舞台挨拶を地方新聞・雑誌が取り上げる...

これがヒットの原因になったのだろう。

舞台挨拶もSNSを使つての宣伝もメジャーの映画会社がよくやっている事。ただ、この『手作り感』はたぶん今の映画会社には絶対出せない。



新しいアイテムを駆逐したはいえ、宣伝にここまで『手作り感』を出したのは稀有な事で奇跡ともいえる現象かもしれない。

これからデジタルテレビの大画面化・VR化が本格化すると、《映画館》での上映と共にVR上映館もできるのだろうが、映像に入り込んでしまうVRは、また違うモノになってしまう。たとえば『スタートレック』のホログラムの世界ね。

しかし、VRにしても映画にしても作っている人は人間。今後の『手作り感』満載の上田慎一郎監督の作品も楽しみだし、VRでも新しい作品を作る監督の登場も多いに期待してもいいと勝手に思っている。

終

ウキペディアを参考にさせていただきました。

いつも読んで頂いてありがとうございますm(_ _)m

読者の方から『女優霊』のリクエストがありましたので再発行しました。

リクエストありがとうございました(^_^)。

なお、コラムの[前編][中編]は下記をご覧ください。

164号 <http://p.booklog.jp/book/127022/read> [前編]

165号 <http://p.booklog.jp/book/127343/read> [中編]

また、この作品、こんな作品、この俳優・女優さんの出演した作品が
載ってる号を読みたいという要望があれば、

cinemaz-life@movie.nifty.jp

にメールかコメントを頂ければ幸いです。

